

おもかげを糸に残して縁かいな

西松布咏

夏と秋のゆきがふ空の通り路はかたへ涼しき風や吹くらむ
 九月九日北陸の旅を終え小松空港から羽田に向う空を眺め、ふと古今集の一句を思った。今年もこのほかの暑さだったが、さまざまな縁の糸が結ばれた忘れがたい夏となった。
 七月二十一日美紗の会の弟子である鶴間太郎君の結婚披露宴に招かれた。母親の茂登子さんが入門し稽古を続ける様子を見て、役者を志し演劇と共通する三味線唄に興味を持ち、いつときは熱心に稽古に通っていた。現在は俳優・奥田瑛二事務所のマネージャーをし多忙な生活ぶりの太郎君へ、手ほどきをした端唄「夏の涼みは両国の出船入船屋形船 上がる流星 星下り 玉屋がとりもつ縁かいな」の歌詞のように、これからも出会う人との縁を大切に新しい船出をしてくださいと祝辞を述べた。翌日お礼の電話で「実は僕達、両国の花火大会で再会し結ばれたのです」との打ち明け話に縁の糸の不思議さを感じた。

八月の末 岐阜での粋艶会・浴衣ざらいの翌日いつかは訪れたいと願っていた京都の山里の宿「美山荘」に立ち寄ることができた。京都市中から車でほぼ一時間。鞍馬を越えて山間の奥深い道を左右にくねり、ようやく花背に付む宿に辿り着く。夏なのに通された座敷はひんやりとして墨絵のような陰影が稽古で疲れた私を柔らかく包んでくれる。前日の会で弟子を叱咤激励し、懸命に糸を弾いた師匠の風体を脱ぎ、暮れなずむ檜の風呂にざんぶりと湯浴みする。深山の緑を渡る風を肌に纏い、夕食まで九月に北陸で予定されている演奏の稽古をした。開け放った月見台の下を流れる川のせせらぎを合いの手に唄う至福のひとつの御礼

を述べると、若い仲居さんが「もしかしたら布咏さんですか？」と聞く。五年前の岐阜での公演「春を味わう」のチラシを手がけてくれた荒木基次氏と共に公演に来て下さった永島聡子さんだと思出し、偶然の再会を互いに喜んだ。鮎と山菜の野趣溢れるお料理をもてなしてくださった若女将は金沢からお嫁にいらしたと知り「さつき弾いていた三味線は東茶屋街の店「福島」であつたんですよ」と伝えると「まああつなつかしい！私の実家の近くです」と美しい瞳が涼しげに蛍のように輝いた。

翌朝 朝食の折に大女将の中東和子さんが挨拶にいらしたので、面影を紡ぐ糸にひっそりと語りかける活花に心惹かれたとお伝えする。「ただ自然に花の命を甦らせることだけを心がけているだけだ」と凛とした微笑はやさしい野の花のようだった。食後に廊下の本棚にあった和子さんの著書「花もごちそう」の美しい写真のページをめくっていると、窓からそよぐ風にのってどこからともなく白い喋



が舞い込んできた。水色の点々が淡く浮かんだ可憐な切り紙細工のような羽根は、やがて甘えるように私の肩に停まった。「このあたりはなぜ大悲山と名づけられたのでしょうか・・・」「ちよつと離れた別所の地には平家の落人が住んでいました」朝食の折にかわした宿の人との会話を思い出す。もしかしたら昨夜の三味の音を聞いて古人が喋る姿で私に逢いに來たのかも・・・とその面影に想いを馳せ、ここでも「縁かいな」をしみじみ感じたひとときだった。

九月六日ネットワン・エグゼクティブネットワーキングミーティング「縁座」に出演のため北陸に向う。会場は一日に何度も湖色が変わる名湖・柴山湖に面した加賀片山津温泉・佳水郷の広間である。この「縁座」は三年前からネットワンシステムズ吉野社長が提唱し松岡正剛氏が総合プロデューサーとして「日本という方法」を探るべく開催している。日本各地の風向明媚な宿でゆつたりとした時を共有し社員と関連会社の交流を深めてゆこうとのなんとと贅沢な企画である。今回は「日本をあらわしたい」をテーマとし石川県出身の岡倉天心と西田幾太郎を中心に松岡氏の「日本をあらわす方法」、松本健一氏の「日本における政治と文化」へと熱い講義が続いてゆく。明治維新から新生日本へと変貌してゆくなかで活躍した人物や思想・哲学がお二人の魅力的な語り口で日本の面影が噴水のように鮮やかに立ち上ってくる。

このようなお二人の後に「面影を糸に残して縁かいな」などと題して三味線と共に壇上の座布団に座るのは滅相もない・・・と沢の蛍のように闇に紛れて消え入りたい心境になったが、私なりの「日本をあらわしたい」と覚悟を決めた。「縁座」の主題歌のような「縁かいな」から始め、庶民の生活や季節の哀愁を唄った端唄・歌沢、明治中期頃から政財界の重鎮や旦那衆が盛んに入り出したお座敷で粋に洗練されていった小唄などをお喋りを交えながら演奏し、最後に世阿弥の「高砂」の後謡を地唄で唄った。高砂の浜を掃き清めていた翁と媼は松の精の化身で変わらぬ色の相生の松は永遠に生きる未来への象徴であるという。ふと昨年大津波にみまわれた陸前高田の浜に空高く残った一

本松の面影が心によぎった。

天井の高い広間に私の声と三味線は良く響き「縁座」に集った方々の心に届いたようで嬉しかった。その後の宴会二次会も和やかな雰囲気包まれ名残りのなかで長い一日の幕が下りた。

ようやく緊張の帯を解き、眼前に灯りが揺れている湖面が広がる露天風呂に身をゆだねる。面影の糸はどうやら紡げたようだ・・・と星が滲む漆黒の空を見上げると浜風に揺れている草むらの蔭から虫の音がすかに震えた。

「縁かいな」の糸は夏から秋へと涼風に吹かれてこれからどんな色に深まってゆくのだろうか



季節と五感

和光 貴俊

ニューヨークでの約三年半の駐在生活から東京に舞戻り、日本の夏、というのはかくも過酷だったか、というほ

どの暑さと湿気に音を上げる日々。それでも、日本の夏には、ラジオ体操と、朝顔と、蝉しぐれと、入道雲と、高校野球と、土用の鰻と、西瓜と、かき氷と（なんだか続けて書いてただけでお腹が痛くなってきた）、鎮守の森の木陰と、昼寝と、蚊取り線香の匂いと、風鈴と、花火と、夜店と、鈴虫と、怪談と、肝試しと、そして何より、布師匠が粋で涼しげな紹の着物と小気味よい三味で聞かせる小唄がある（七月十四日の港南区民ホールでの江戸唄と舞踊、堪能させていたきました）。

アメリカでは、こうはいかない。日本人の季節感の世界中で最も鋭敏で、繊細で、そしてノスタルジックなものだと思いが、これは、五感のすべてにつながっているからこそ研ぎ澄まされているように思う。自分が海外にいて飢えていたのは、こうした季節感（全体）とそれを呼び起こす、五感それぞれに訴えかける懐かしくて愛おしいもの（部分）だったのかな、と感じている。

アメリカ人と季節について話していると、「もちろん、アメリカ人にだって季節を感じるトリガー（きっかけ）」となる事柄はたくさんある」というが、どうも我々の感覚とは微妙に異なる。この号がみなさんの目に触れる頃はもう、秋だろから、ニューヨークたちの感じる「秋」の要素をあけてみると、アメリカンフットボールの開幕（何しろ、彼ら、特に男連中にとってはこれが大事で、秋から冬にかけての日曜の午後は、昼過ぎから氷の入ったバケツにビールをたくさんついで大きなソファに陣取り、足はたらいに入れたためる湯に浸しながらポップコーン片手に近所の友達とテレビ観戦、というのが定番だそう）、コロンバス・デーのバルーンパレード、ハロウィーンのおぼけカボチャとトリック・オア・トリート（子供たちが仮装して近所の家をめぐり、「何かくれないと、いたずらしちゃうぞ」と言っつまわってお菓子をもらう習慣）、ニューヨーク・シティー・マラソン、サンクス・ギビングのターキーとマッシュポテトとグレイビー（肉汁ソースのようなもの）とホームメイドパイ……。いやはや、たしかにこれはこれで楽しそうだし、私自身もこのうちかなりの部分を体験させ



てもらったが、季節感が「イベント」と強く結びついていて、そして、日本と比較すると、「音」と「匂い」に関連する部分が相対的に少ないような気がする。

日本の映画会社の人に聞いた話では、日本の夏を舞台にした映画を海外に配給する際、蝉しぐれの音をカットするケースが多いとのこと（外人には単なるノイズにしか聞こえないらしい）。ちりん、という風鈴の音や、打ち水からふつとたちのぼる土の香り。こうした刹那にすら一瞬の「涼」を感じ、「夏」を思うことのできる日本人でほんとうによかった、とあらためて思う。

布師匠、また、「季節」や「恋」を感じる刹那を求めて、小唄の会にまいります。

親友と語りたかった、江戸と上方、 「いき」と「すい」

高橋 幸治

大学を卒業して最初に就職した広告代理店の配属先が関西の支社だったため、大阪に三年近く住んだことがある。まだバブルの余韻さめやらぬ九十年代初頭だったこともあり、同期が総勢二百人弱、その約半数が日本全国の支社に勤務となった。もともと関西には縁もゆかりもなかったか

ら、自分が大阪へ配属されるなどは夢にも思っており、正直、すぐにでも会社を辞めようと思った。

しかし、まあ、長い人生のうちの数年、大阪に住んでみるのも悪くないと自分に言い聞かせ、一九九二年七月から大阪に住むことになった。いまにして思えば、あのときに国立文楽劇場に通っておけばよかったとか、京都や奈良をもっと見ておけばよかったとか、後悔することしきりなのだが、なにせ二十代前半のときのこと、そうした上方の文化や伝統にはほとんど触れることなく、三年後、その会社を辞めて東京に帰って来てしまった。

そんな大阪時代、いちばん仲の良かった同期のMが四年前に脳腫瘍になった。Mとは同じ部署だったこともあり、眞面の寮から毎日一緒に会社に通った。出版社に再就職して大阪に出張した折には、仕事が終わった夜、いつも北新地で遊んでもらった。そのMがいよいよ緩和ケアの病院に移ったとの知らせを受け、今年の二月、大阪まで見舞いに行った。ベッドに半身を起こし、非常にゆっくりながらも会話を交わすことができ、かたい握手をして別れた。

それから数週間後、他の同期から連絡があつて、入社二十周年を祝し、退職した連中も含め、七月二日、みんなで集まろうとの誘いを受けた。東京本社の連中から声をかけてもらったのだが、ここはやはり大阪の同期たちと再会したいという気持ちから、大阪での祝宴に参加することにした。気になっていたMの見舞いにも行きたかったからである。

ちょうど同じ頃、師匠から「粋なおはなし 江戸・上方粋くらべ」(七月十四日、芝浦港南区民センター)の案内をいただいた。次第に病状が進行するMのことや、同期たちの勤続二十年をきっかけに、大阪時代の日々を自分の中で反芻していた時期だけに、奇妙な縁を感じた。

大阪に住んでいた時、東京との違いを最も感じたのはやはり人との距離感だった。もちろん大阪のほうが人との距離感が圧倒的に近い。初対面の人であっても、こちらが困惑するところまでぐっと入り込んでくる。それが東京とは異なる大阪の流儀だと頭ではわかっていても、どうしても

気圧されてしまう。そんな記憶が「上方チーム」の三川美恵子さん、山村光子さんの「しゃべり」を拝聴しながら鮮やかに蘇った。

一方、「江戸チーム」の我が師匠と花柳千寿艶さんの醸し出す空気感やはり江戸的である。観客との間に適度な距離がある。これは両チームの方々のお話の中にあつた江戸の「粋いいき」と上方の「粋いすい」の違いに由来するのだろう。江戸の「いき」を体現する基本デザインは編模様である。つまり平行線。男女の間柄においても、「いき」な関係とは、交わることもなければ、離れていくこともない、永遠の宙吊り状態であつて、その間合いが音曲を生み、江戸唄独自の世界観となつた。九鬼周造の名著『「いき」の構造』にも、「運命によつて〈諦め〉を得た〈媚態〉が〈意気地〉の自由に生きるのが〈いき〉」とある。

九鬼周造は同書の中で上方の「すい」については言及していないが、岩波文庫版のあとがきでフランス文学者の多田道太郎がこう述べている。「粋(すい)とは色ごとにかかり、しかも色ごとに理解ある態度を言う。(中略)上方で、粋(すい)というのは、たとえば赤白のはっきりした、感覚的にあざやかなーという意味である」。三川美恵子さんの上方唄を聴いていても、パワフルな人々とカラフルな情景が目につく。平行線の張り詰めた緊張感ではない。だから男女関係も上方では心中まで行き着いてしまう。それに対して江戸唄は情緒的かつ内省的である。

「粋なおはなし 江戸・上方粋くらべ」の会場では、そんな江戸と上方の違いを、自分の過去の記憶と照らし合わせながらずっと考えていた。そういえばMは早稲田大学で演劇を専攻しており、芸能についても詳しくたから、いまなら大阪に二十年住んだ彼と、江戸と上方の文化についていろいろと語り合えるかもしれないと思った。しかし、七月二日に会ったMはもう話すことなどできなくなっていた。師匠の公演の二日後、七月十六日の早朝、彼は四十三歳の若さで逝つた。広島出身の関西人だったが、自分の死と冷静に対峙する姿勢は、どこか「いき」を感じさせる男だった……。



古代文字による書と小唄と宴の夕べ

鈴木 幸三

神奈川県の西、箱根と西丹沢の間に山北という町はある。神奈川県では二番目に広い面積を持ちながら殆どは山で、谷あいの河岸段丘の僅かな平地に人が住む。町の南を東名高速が走り国道二四六号線が走り、十数年後には新東名高速が走ると言う。日本の東西の物流の通過点である。そんな町に今年開創五百年を迎えた曹洞宗玉鳳山種徳寺はある。その寺でこの夏「古代文字による書と小唄と宴の夕べ」というささやかな催しが開かれた。

飾られた書は、磯部英子(雅号・盞南榮)女史が書かれた「月虹」という作品。幅が三百八十センチ、高さが九十センチという大作である。右から「鳳・月・虹・霊・光」という古代文字が描かれている。これを求めた当夜の宴の主人は、「月に向かって虹をたなびながら飛ぶ鳳の美し

さに感動した神の心が美しく光り輝く」状況をイメージした。空を翔け抜けるその様子が書にははつきりと表現されている。誠に幸せを呼ぶ新築された秋田杉で造られた家にはうつつの作品であった。

「月虹」は何によってイメージされたのか。作者によれば西松布詠師の唄と話によってであるという。それを聞いた西松先生が作品の前で唄ってみたいということでごこの夕べは実現した。当日集まった人は小唄とはほとんど縁がない人たち。呼ばれて来てみたものの何が始まるのか興味津々といったところであつたろう。しかし、布詠師の解説の声と体軀からは想像のつかない腹の底から響く声と艶やかな三味線の音に言葉は失って、最後は心からの拍手を送っていた。五百年を機会に耐震工事で内装が綺麗になった本堂中に布詠師の奏でる音楽は響き渡った。お経とは違う音楽で種徳寺にぬむる魂を鎮めたに違いない。

江戸の庶民の音楽が芸術の領域まで高められ唄う音楽から聴く音楽へ変化したのかもしれないが、また庶民のもとへ戻ってきて文化が続くといったと思った。

美紗の会に入門して

如月 まみ

今年の三月に入門させていただきました。

この「たより」を毎回いただく度に、布詠師はじめ、皆様の素晴らしい寄稿文を拝読するにつけ、「いつか私にも番がまわってくるのだろうか・・・」と恐れていたのに、すぐ回ってきてしまいました。

着物を生業にするようになってから「いつか小唄とお三味線を習いたい」と密かに思い、邦楽にはどんな種類があるのかも知らず、歌舞伎でしか邦楽を聴いたことがないのに、七年ほど前に小唄に入門しました。念願だったことが始められた喜びで有頂天になり、始めて三ヶ月ほどで、青山のクラブイベントで、弾き唄いの披露をしてしまいました。今思うと顔から火が出そうです。無知というのは本当に恐ろしい。淡々とお稽古が続けていた中、一昨年の十二月、友人が「きつと気が合うから」と新橋の芸者さんと引き合

わせてくれました。私は、最近小唄だけではちよつと物足りなくなってきたこと、もつといろいろな唄を勉強したいということを伝えると、じゃあ一緒に小唄ユニットをやろう！とすぐ意気統合しました。

その縁で、去年の夏、今は亡き神田福丸師匠のもとへ端唄のお稽古にあがりました。初めて聴く端唄。そして福丸姐さんのちよつとドスがきいた鶯のような美声。みるみるのめり込んでいきました。と同時に、なぜか最初から頭のどこかで、この方から一曲でも多く、習えるうちに習えるだけ吸収しよう、と時間の限りをいつも意識して、それまでにはないくらい熱心にお稽古に打ち込みました。そんな中、今年の一月に神田福丸師匠が事故で急逝。あまりにあつけなく、お先真っ暗になりました。

これからというところだったのに・・・この先他についていきたいと思うお師匠さんが他にいるかしら・・・と、ぼんやりと情報を集め始めました。なかなかピンとくる情報はありませんでした。悲しみに暮れていましたが、福丸姐さんだって、もつと唄いたかったに違いない、と思つたら、その分まで唄い継がなきゃ、という強い気持ちに変わっていきました。

初七日で何った時に、仏前で「これからうんと精進しますので、どうかいいお師匠さんと巡り合わせて下さい」とお願いしました。それから間もなくして、知人から「アジール」のこと、布詠師匠のことを聞き、その瞬間閃きがありました。帰つてすぐにYouTubeを検索してDVDを取り寄せて、布詠師匠の声、パフォーマンスを拝見して、この人だ！福丸姐さんが引き合わせてくれた！と感じました。お会いして、ますます実感しました。女性の艶と儚さと強さを体現する布詠師匠の声、お三味線の音色、ご本人が苦手とおっしゃるMCもとても素敵だなと毎回うつとりしております。そのお師匠のもとで勉強させていただきつつ、私の得意分野である着物のことでは、お師匠のサポートをしてさしあげられたらと思っております。

取り留めの無い文章になってしまいましたが、会員の皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

《今後の予定》

●十月二十一日(日)午後十二時半より

東大正門前 太栄館

第四十四回 美紗の会のつどい

美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

●十一月十四日(水)午後六時より

上野 鈴木演芸場

春風亭正朝独演会

ゲスト 西松布詠

江戸唄あれこれ

●十二月二日(日)午後一時より

港区 観智院

楷書の表現、草書の表現

『地唄舞に見る日本美の世界』より

解説 花崎杜季女

舞 花崎杜実女

花崎かつら

唄と三弦 西松布詠

■たより 第73号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三ー二ー二

白金台プレイス三階

電話 (二四四一) 二七二六

(五四四七) 二四二二

E-mail: nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misas

